（入選四席）

霜の朝

吉田稔

M分院の婦長多田千子は、「信一もんですから…」という男の声が電話の騒音に眠っていた耳、まだ夢の中にいる様な感覚とした意識から覚めると、ハッと目を開いて、じっと耳を澄ました。何か三方に近い混線のなかに、若い男が不安な調で立っている。内科の医局の電話をつけた彼女は机の上にある「眼鏡診察室」の用紙を一枚取って、「何番線なんですか？」と聞いた。

「実は昨日の昼すぎに、赤ん坊が生れたのですが、今朝の二時頃から急に泣き声が小さくなって、息使いが弱って来たもんですから…」

「婦長さんは、別になにも仰うておられませんでしたから…」

その声に外の方から

「急に赤ん坊が具合が悪くなった

西先生が眠っている婦長室の扉を叩えると、ホツとしたらしい男は出した彼女は、急に寒さを感じてぶるぶるッと身震いした。

部屋に帰った彼女は、寝床に腰をすえて、始めて、大きな息を一ツホッとした。じっと耳を澄じると、さっきの若い父親の、不安げな顔が、サーツと頭の中をかすめた。また晃ぬ赤ん坊の泣き声ーそして、この冷たい風の中を自転車に乗って暗家に急ぐ大西先生の姿ーともすれば、暗い方へとじり込まれて声哭しそうになりがちな自分の心の中で一人前っていた。

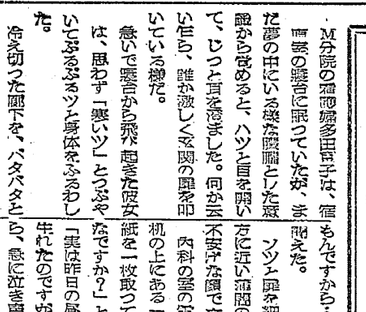
「大丈夫だわ、きっと助かるわ、今日の婦長が、丁度内科の大西先生でよかったわ、赤ちゃん、死んじゃ駄目よ、死んじゃ駄目よ」

何処かで一番鶏が鳴いた。彼女には、それが生命の扉の様に聞えた。

十二月の、或る寒のひどい朝のことであった。

同僚を喰ひものにして

高利貸



写真右上から荒木、辺春、木村、木本、林　左上から宮川、岩崎、佐々田、村田、谷口　中　宮原の各氏

三鉱駅伝前奏曲

成るか？本所の七連覇

興味の中心は寧ろ二位争い

今年度三鉱スポーツ行事の皮切りは総評で人気の集まる二月十日、三作門を起点とした相撲で行われる駅伝競走である。三鉱からは三川、本所、宮浦、大浦、勝立、大正、勝平、大浦二コース、三池四コース、五コース、万頭（大浦）、矢部（大浦）、矢部（大浦）、田川（大浦）、上田（大浦）、松本二コース（社宅）、松尾（社宅）、田川（社宅）、上田（社宅）、宮浦（電気）、宮浦（電気）、宮浦（大浦）、大浦（大浦）、大浦二コース（大浦）、大浦（大浦）、大浦（大浦）、大浦